富里町南内野遺跡

— 県立富里地区(仮称)高等学校建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1985

千葉県教育庁施設課
財団法人 千葉県文化財センター

富里町南内野遺跡

みなみ うち の

— 県立富里地区(仮称)高等学校建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1985

千葉県教育庁施設課
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

新東京国際空港の開港は，従来から農業に基盤を置いていた周辺市町村に，大きな変貌をもたらしました。なかでも，成田市に隣接する富里町では，近年著しい人口増加と急速な都市化が進行しております。しかし，一方で，富里町には先土器時代，縄文時代及び近世を中心とする遺跡が数多く所在することが知られています。

このたび，この地域に県立高等学校の新設を計画するに当って，千葉県教育委員会では，用地内に所在する埋蔵文化財について，事前に発掘調査を実施し，記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は(財)千葉県文化財センターが担当することとなり，昭和60年４月から５月にかけて調査を実施しました。その結果，先土器時代及び縄文時代早期の貴重な資料を得ることができました。

このたび，その調査成果を「富里町南内野遺跡」として刊行することとなりました。この報告書が学術資料として，また，文化財保護思想の普及のために，広く一般の方々にも利用されることを望んでやみません。

終りに，発掘調査から整理に至るまで多大な御指導，御支援をいただきました千葉県教育庁施設課，同文化課，富里町教育委員会をはじめ，関係諸機関にお礼を申し上げるとともに，調査に協力された調査補助員の皆様には心から謝意を表します。

昭和60年12月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　　山　本　孝　也

例　　言

1　本書は，千葉県印旛郡富里町七栄字南内野 192番地他に所在する南内野遺跡の発掘調査報告書である。遺跡のコード番号は 324－004 とした。

2　調査は，発掘を昭和60年４月１日より同年５月31日まで，整理を同年９月１日より同月30日までとし，千葉県教育庁文化課の指導のもとに，千葉県教育庁施設課との委託契約に基づき，財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。

3　発掘調査，整理，本書の原稿執筆及び編集は，調査部長鈴木道之助，同部長補佐岡川宏道，班長高橋賢一の指導のもとに，調査研究員鳴田浩司がこれにあたった。

4　本書で使用した地形図は，以下のとおりである。

50,000分の１図（ＮＩ－54－19－10）　国土地理院発行

2,500分の１図　富里村平面図11（Ⅸ－ＫＦ91－３），同16（Ⅸ－ＬＦ01－１）　富里村発行

5　発掘調査から報告書の刊行にいたるまで，千葉県教育庁施設課，同文化課，富里町教育委員会の関係者の皆様，ならびに篠原正氏をはじめとする多くの方々から御指導・御助言をいただいた。深く謝意を表します。

目　　次

序　　文
例　　言
第１章　調査に至る経緯と調査経過……1
第２章　遺跡の位置と歴史的環境……2
第３章　遺　　物……6
第４章　結　　語……11

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図……3
第２図　調査区周辺地形図……4
第３図　グリッド配置図……5
第４図　土層断面図……6
第５図　遺物出土状況図……7
第６図　先土器時代遺物実測図……8
第７図　縄文式土器拓影図，石鏃実測図……10

表　目　次

表　1　石器計測表……9

図　版　目　次

図版１　南内野遺跡遠景，調査区全景
図版２　礫出土トレンチ，先土器確認調査土層断面
図版３　拡張地区全景，拡張地区東壁土層断面
図版４　先土器時代遺物
図版５　縄文時代遺物

第１章　調査に至る経緯と調査経過

近年，新東京国際空港の開港に伴い，成田市を中心とした近隣市町村は，都市化の傾向が顕著となっている。とりわけ富里町は，県内を東西及び南北に横切る陸上輸送路の交叉点に当るという地理的・経済的条件にも恵まれ，県下でも有数の人口急増自治体となっている。

この状況に対処するため，千葉県教育委員会では，県立富里地区（仮称）高等学校の建設を富里町の協力を得て実施することとなった。これに伴い昭和59年６月４日付けで，富里村長から千葉県教育庁文化課へ「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会があり，同月11日に現地踏査を実施したところ，用地の一部が周知遺跡「南内野遺跡」に当ることを確認し，その旨を回答した。その後，県教育庁文化課では，南内野遺跡の取り扱いについて関係諸機関と慎重な協議を重ねた結果，やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議がととのい，発掘調査は当文化財センターが担当することになった。

現地調査は，昭和60年４月15日から同年５月22日まで実施した。発掘調査は 1,000㎡を対象面積とし，確認調査より開始した。調査区には公共座標に近似させて50ｍ方眼単位の大グリッドを設定し，大グリッドをさらに５ｍ方眼の小グリッドに分割し，１単位の大グリッドが 100の小グリッドから構成されるようにした。大グリッドは調査区域のみならず，高校用地内を網羅するように基準点を設定し，縦列を西から東にＡ，Ｂ，Ｃ…とし，横列を北から南に１，２，３…として，これらを組み合せて個々の大グリッドをＥ４，Ｆ５等と呼称した。大グリッドに包括される小グリッドは，北西隅を基準点とし，西から東に00から99までの２連番号を順次付して南東隅に至るよう設定した。（第３図）

４月１日より調査の準備に入り，同月13日に器材を現地に搬入した。翌週15日に現場内に幕舎を設置し，外柵を設けた。また同時に杭打ちを行ない，トレンチ設定後確認調査に入った。トレンチは２×５ｍの大きさで，10ｍ×10ｍのグリッドの中に１個所ずつ設定した。４月19日にはＦ４－42地区の表土層中及びソフトローム上部から多数の礫片が出土した。４月22日には上層の確認調査が終了し，同日に下層の確認調査に移行した。上層の確認調査では，当初予想されていた縄文式土器の包含層は，畑の深耕等により確認することができなかった。結果的に表土中よりわずかに９点の土器片が検出されたのみであり，遺構は全く確認されなかった。５月９日に至り下層の確認調査が終了したが，Ｆ４－42地区以外からの石器の出土はなかった。

結局，ソフトローム層中より礫片を出土したＦ４－42地区を部分的に拡張することとし，５月９日から表土除去に入り，５月22日までに全ての作業を完了させた。この拡張区では，礫片以外に石鏃・掻器・楔形石器等の利器や石核・剥片類，縄文式土器が検出された。５月23日以降同月末日まで写真・図面等の整理を実施した。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は印旛郡富里町七栄字南内野に所在する遺跡である。東関東自動車道富里インターチェンジより国道409号線を南へ約1km，国道296号線と交差する七栄交差点から，更に南へ約500ｍほどに所在する。現在では太平洋岸と東京湾岸を結ぶ交通の要衝となっている。

「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－」によれば，南内野遺跡は高崎川支流最奥部の小支谷を挟んで３ヶ所に分布するが，今回調査を実施した地点は，最も北側の小支谷最奥部に位置するものである。

遺跡は標高約40ｍの洪積台地上に立地する。印旛沼に注ぐ高崎川は，富里町の西側から入り込み，幾つもの小支谷を形成する。当遺跡は樹枝状に分岐した小支谷の最奥部に位置する。周辺は谷の開析が浅く，緩い斜面を呈する波状の台地が連綿とする。

北総台地の中央に位置し，東京湾，利根川，太平洋岸の分水嶺に当るため，周辺遺跡は先土器時代から縄文時代早期のものまでが，既報告から特に注目される地域である。

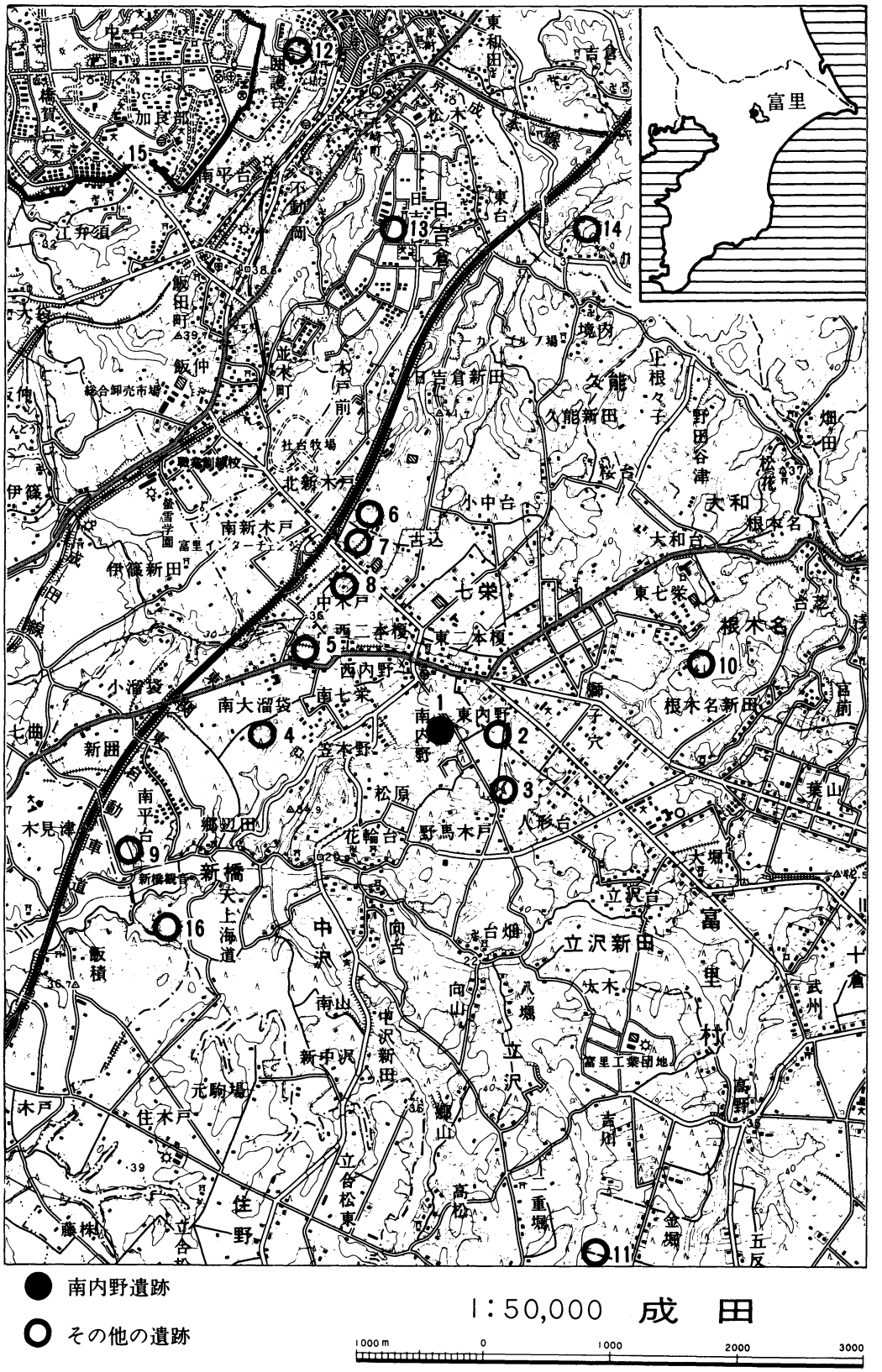
先土器時代の遺跡では，南内野遺跡に隣接する東内野遺跡(2)や，獅子穴Ⅵ遺跡(3)，南大溜袋遺跡(4)，北大溜袋遺跡(5)などが調査例として挙げられる。特に多量のナイフ形石器や東内野型尖頭器を出土した東内野遺跡，そして多量の尖頭器と植刃を出土し，県指定史跡となっている南大溜袋遺跡は，北総地域にあって，空港関連遺跡と並んで良好な資料を提供している。他に未調査であるが，表面採取例としては，北新木戸Ⅰ(6)，Ⅱ(7)遺跡，中木戸遺跡(8)等で，ナイフ型石器，石核石器，石刃，尖頭器など多数の資料が検出されている。

縄文時代草創期，早期の遺物の分布は，引き続き上記の遺跡範囲に重復するものが多い。他に同期の遺跡には，寺沢遺跡(9)，松作遺跡(10)，金堀遺跡(11)などに調査例がある。中期，後・晩期に至ると根古名川などの河川の中流域に遺跡の分布が移動し，囲護台遺跡群(12)，郷部北遺跡群などの大遺跡が出現する。

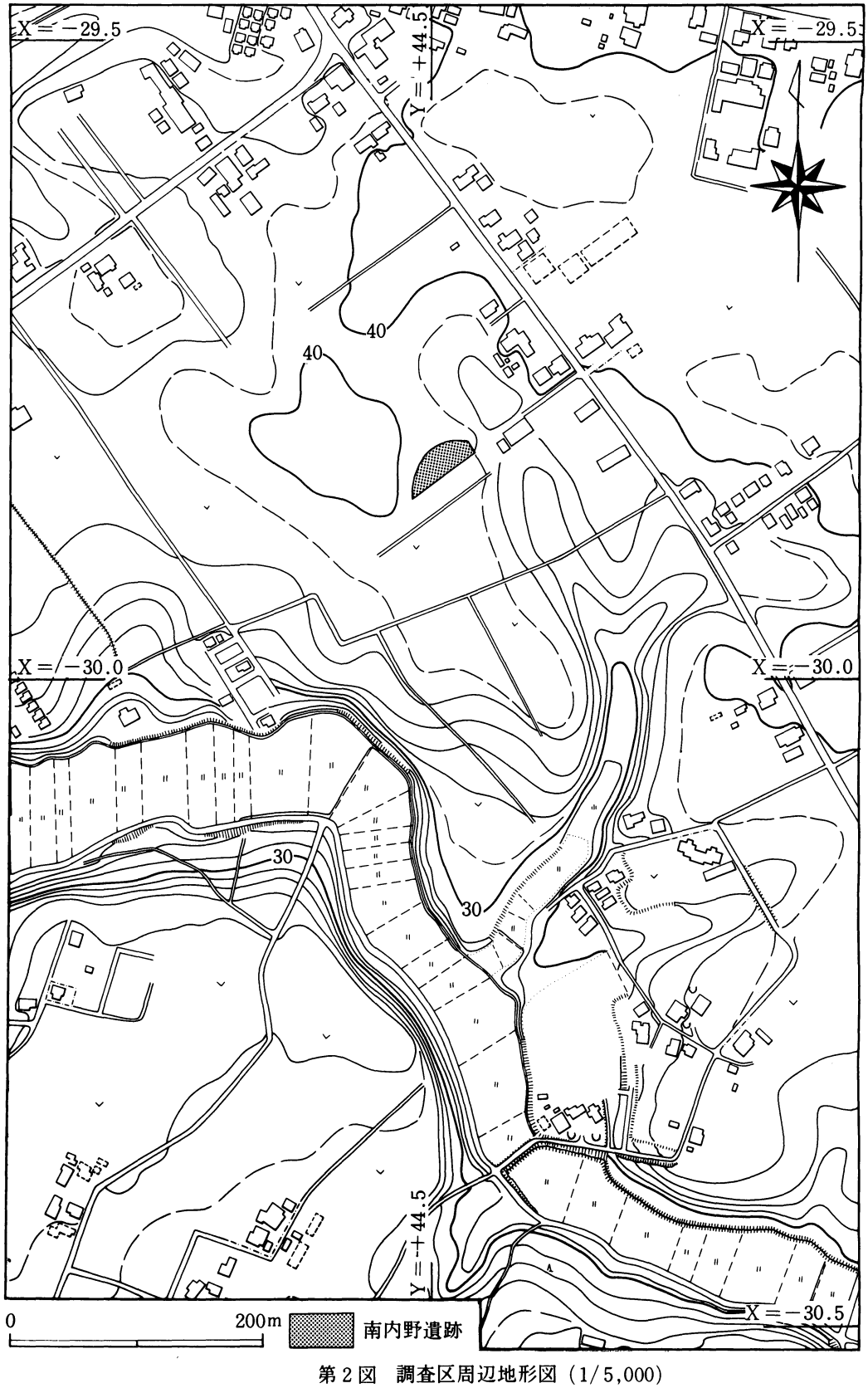
そして，古墳時代以降は根古名川中・下流域や印旛沼東岸，高崎川中・下流域に遺跡が濃密に分布するようになる。根古名川流域の日吉倉古墳群(13)，川栗台古墳群(14)，囲護台遺跡群，郷部北遺跡群，印旛沼東岸の公津原古墳群(15)，同遺跡群(15)などのすでに発掘調査されているものも含めて大規模な遺跡が形成される。また，他方，高崎川流域の富里町内での同時期の遺跡の調査例としては，寺沢遺跡，新橋遺跡(16)がある。共に墨書土器を出土する集落遺跡の調査例である。

中世以降，近世に至り南内野遺跡を包括する広大な地域は，佐倉七牧のうちの内野牧とよばれ，佐倉藩の管轄下に野馬が放牧されていた。現在では野馬土手や，「南大溜袋」，「獅子穴」，「内野」などの地名に，当時の面影を残している。

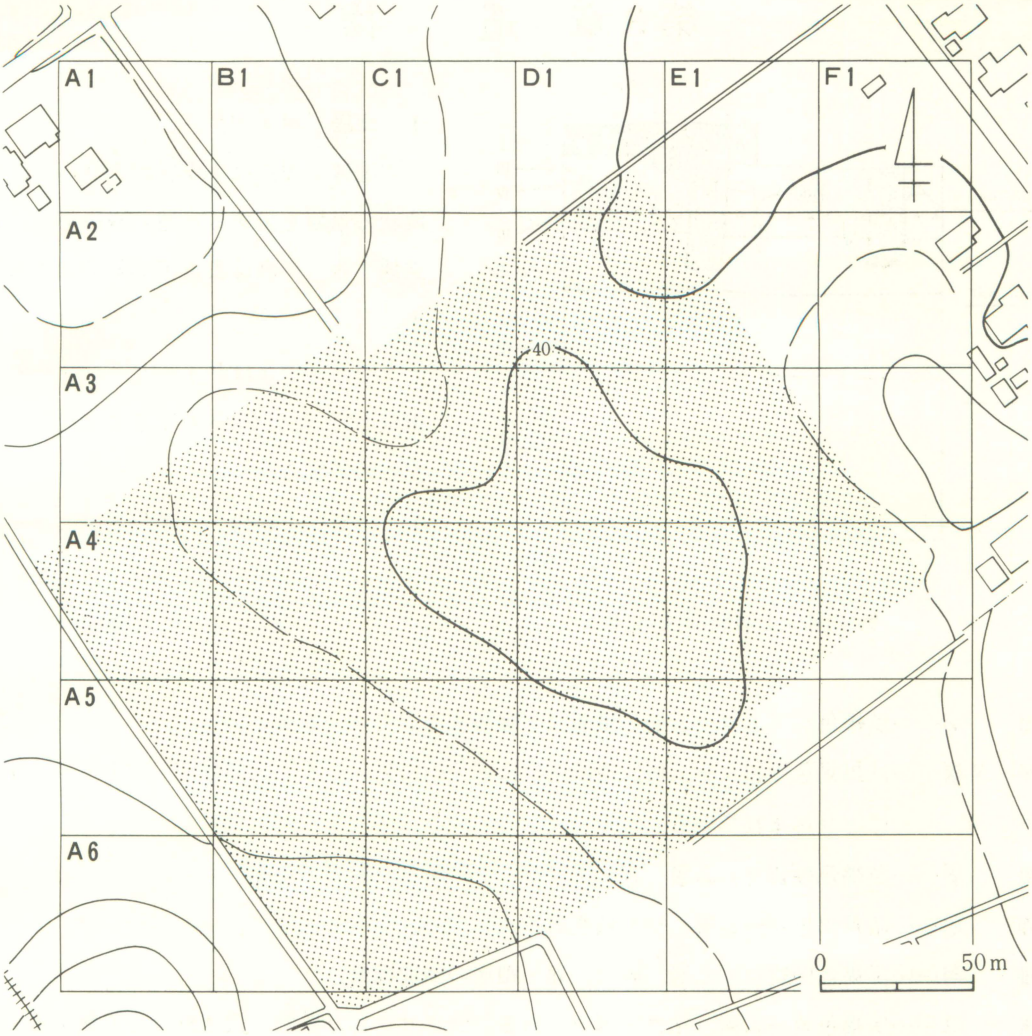
参考，引用文献は一括して巻末に記した。

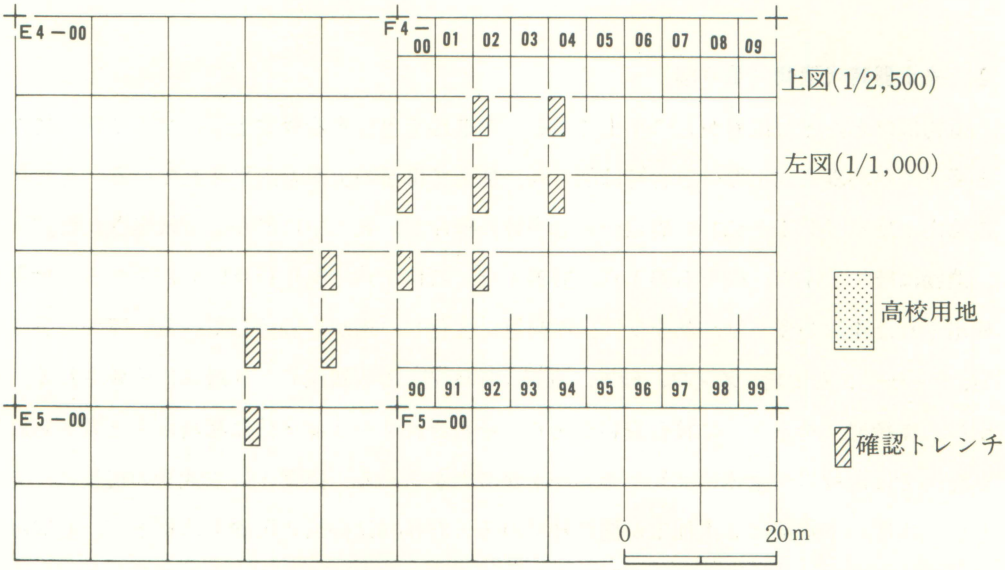

富里
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
南内野遺跡
その他の遺跡
1:50,000 成田
1000m 0 1000 2000 3000

第1図　遺跡周辺図



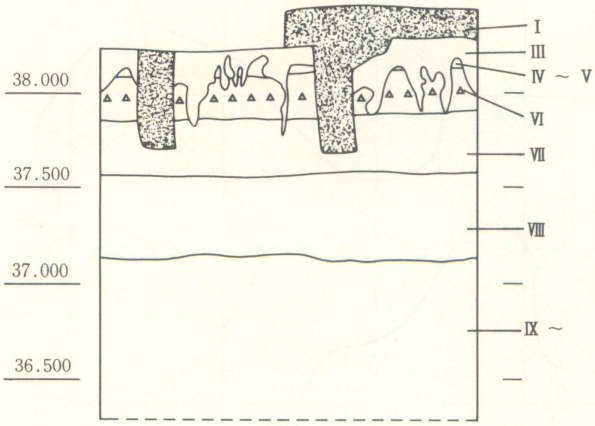
第２図　調査区周辺地形図（1/5,000）





第3図　グリッド配置図(上図　大グリッド，下図　小グリッド)

第3章　遺　　物



第4図　土層断面図(1/40)

1．土層（第4図）

本遺跡は周辺に小支谷が入り込み，波状の景観を呈する台地の縁辺部分に立地する。標高は表土下で約38mである。

土層サンプルはＦ４－24トレンチの南壁面で，表土下2mの深さまで観察したものである。

Ⅰ　　層……耕作土。黒色土中にハードロームブロックが混在。深耕により部分的にⅦ層にまで達する。

Ⅲ　　層……黄褐色ソフトローム層。Ⅲ層以下Ⅷ層まで立川ローム層。

Ⅳ～Ⅴ層……淡黒褐色硬質ローム層。遺跡内には部分的に見られる。大部分がソフトローム中にとり込まれている。

Ⅵ　　層……黄褐色硬質ローム層。Ａ・Ｔブロックの所在が顕著である。

Ⅶ　　層……暗黄褐色ローム層。やや粘性あり。

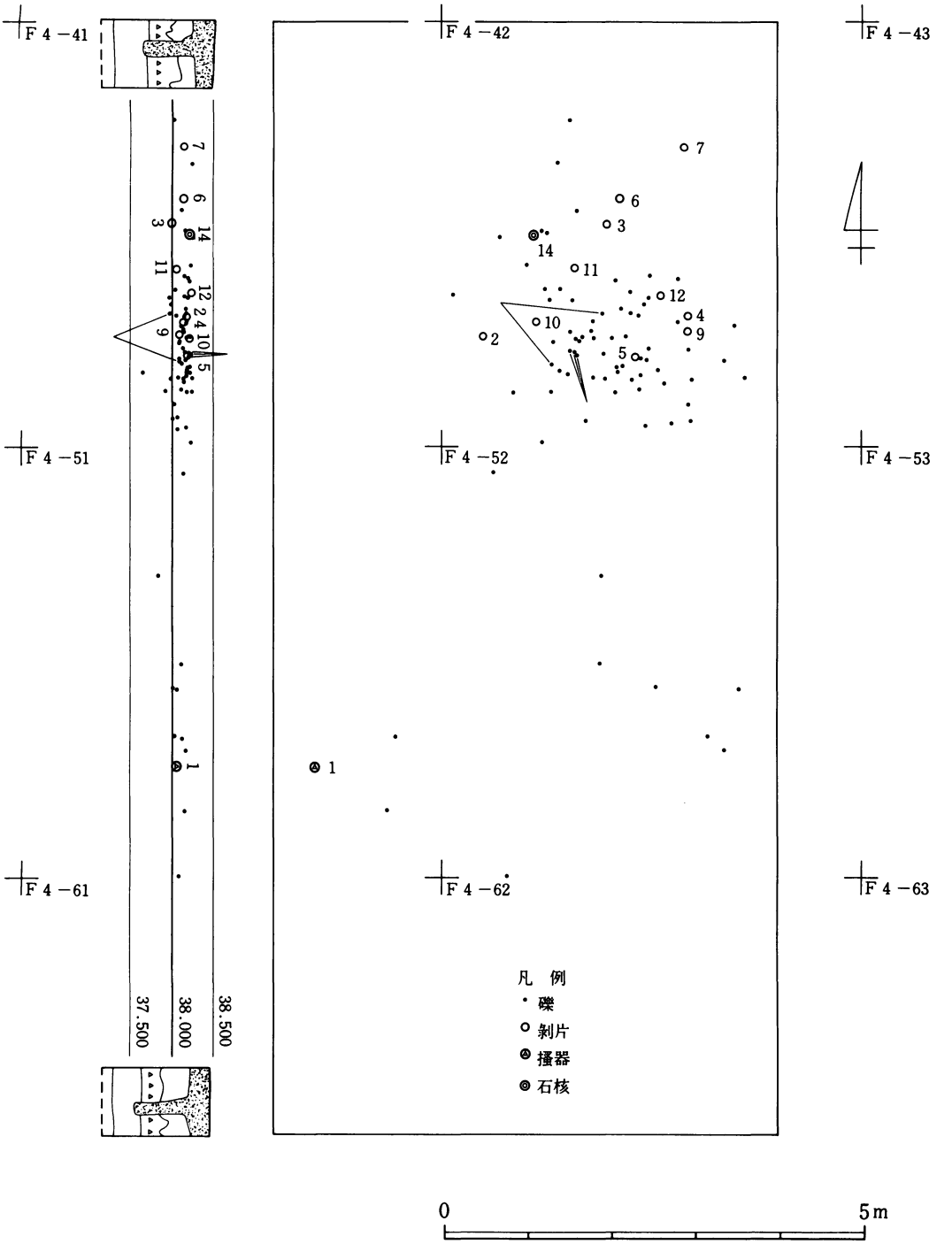
Ⅷ　　層……黒褐色硬質ローム層。砂質。Ⅶ・Ⅷ層の識別困難。

Ⅸ　～　層……灰褐色ローム層。粘性・湿気がある。サクサクした感触。武蔵野ローム層上面。

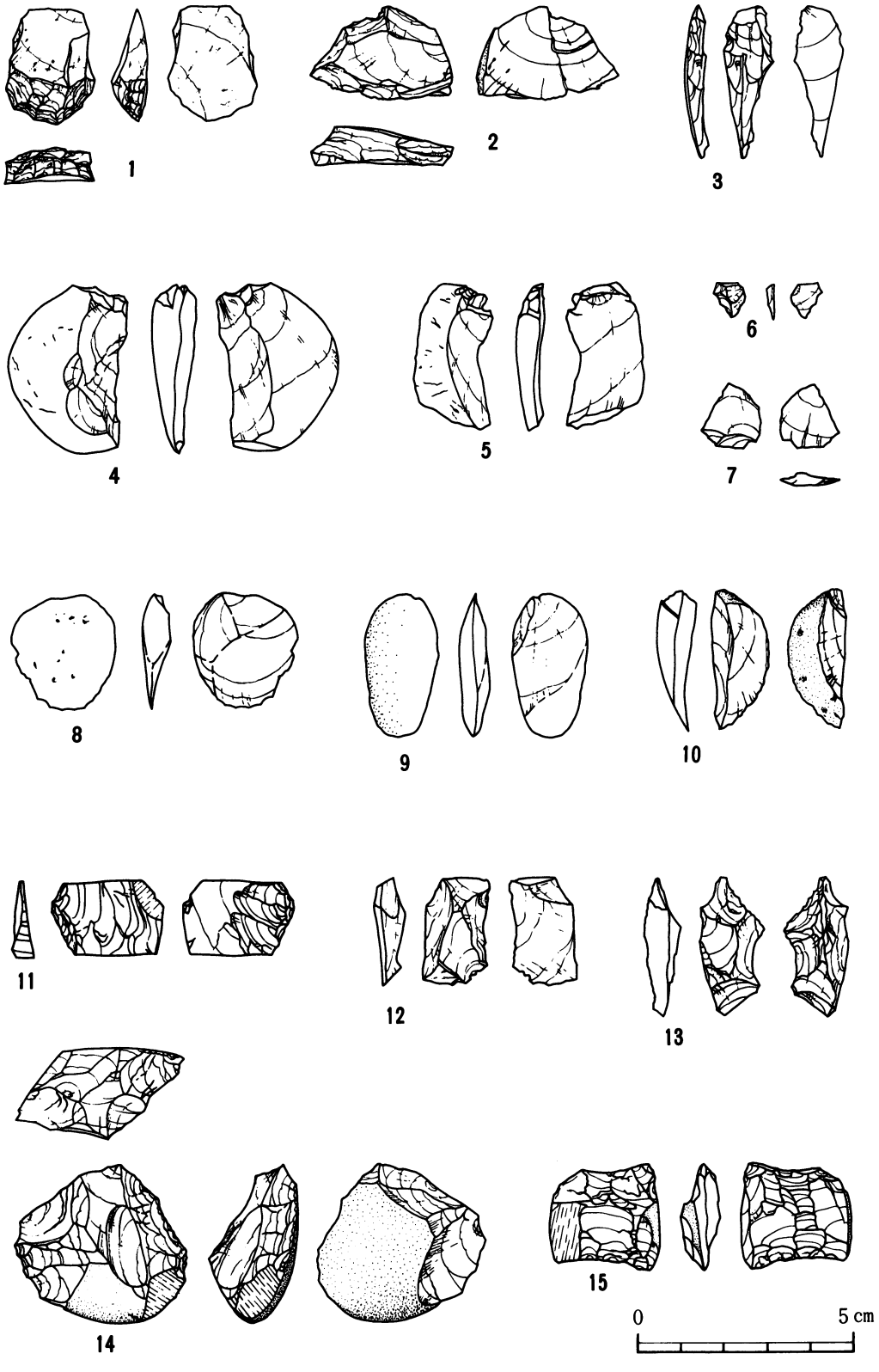
2．先土器時代遺物（第6図）

遺物はほとんどがⅢ層からの出土である。本遺跡を包含する台地上は，ゴボウ等の耕作による深耕のため縄文式土器の包含層は削られ，加えてⅢ層の上面も削平されている。そのため，遺物出土地点（Ｆ４－42）の周辺からも多数の礫片が，表土中に混在して検出された。

遺物は礫片134点，楔形石器１点，掻器１点，石核１点，剥片13点に分類される。最も多く検出された礫片の多くは，熱を受け，赤褐色に変色し，細かく破砕している。礫の石質は流紋岩，チャート，安山岩，メノウ，砂岩，頁岩，凝灰岩，凝灰質泥岩と８種類に分類される。そのうち，流紋岩，チャートに接合資料があり，それぞれ２～３個体分に相当すると考えられる。点数比では流紋岩が全体の35％，チャートが37％を占める。掻器(1)は玄武岩の縦長剥片を素材とし，肉厚の下端部に２次加工が施されている。石核(14)は砂岩の円礫を原材とし，右側縁部に細部調整を施している。楔形石器(15)は表採であるが，左右両端をチャートの原石表面とする剥片を素材とし，上下両側縁に階段状の剥離痕を残す。



第５図　遺物出土状況図（1/80）



第６図　先土器時代遺物実測図

表1　石器計測表

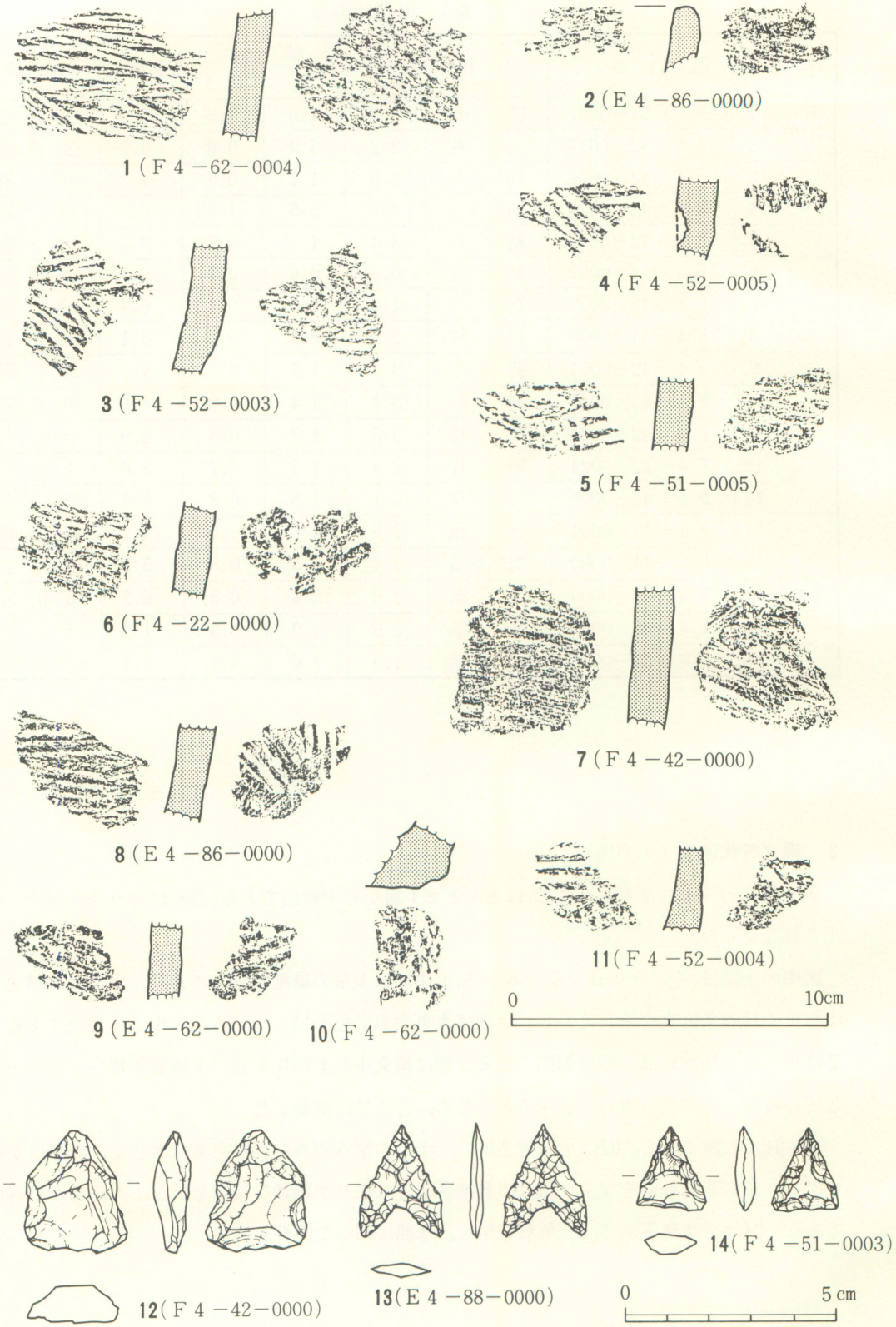
挿図番号	遺物番号	器種	計測値（cm）			重量(g)	石質
			長さ	幅	厚さ		
第6図1	F4－51－0007	掻器	2.7	2.0	0.8	5.0	玄武岩
2	F4－42－0013	剥片	2.2	3.3	0.8	5.9	玄武岩
3	F4－42－0079	剥片	3.5	1.1	0.5	1.3	砂岩
4	F4－42－0029	剥片	3.7	2.5	1.0	8.6	砂岩
5	F4－42－0019	剥片	3.4	1.6	0.5	3.2	砂岩
6	F4－42－0052	剥片	0.8	0.6	0.2	0.1	黒曜石
7	F4－42－0050	剥片	1.4	1.8	0.4	0.4	砂岩
8	F4－44－0000	剥片	2.5	2.4	0.6	3.1	砂岩
9	F4－42－0054	剥片	3.2	1.7	0.7	4.3	砂岩
10	F4－42－0047	剥片	3.1	1.4	0.8	3.0	玄武岩
11	F4－42－0063	剥片	2.5	1.7	0.5	2.9	チャート
12	F4－42－0024	剥片	2.4	1.5	0.7	2.6	玄武岩
13	F4－44－0000	剥片	3.1	1.5	0.8	2.4	チャート
14	F4－42－0004	石核	3.6	4.0	2.0	24.2	砂岩
15	F4－44－0000	楔形石器	2.4	2.5	0.8	5.2	チャート
第7図12	F4－42－0000	石鏃	2.8	2.4	0.8	6.7	安山岩
13	F4－88－0000	石鏃	2.6	1.9	0.3	1.2	チャート
14	F4－51－0003	石鏃	1.9	1.6	0.4	1.1	流紋岩

3．縄文時代遺物（第7図）

縄文式土器片はいずれも小片で，ほとんどがⅠ層からの検出である。これに伴う遺構は全く検出されなかった。

図中の土器は，全て茅山式土器である。胎土中には多量の繊維を含んでおり，表裏共に横位又は斜位の貝殻条痕文を施している。色調は表裏共赤褐色を呈しているが，中心は黒色である。(2)は口縁部，(10)は底部，他は胴部に当る。他に縄文中期土器片1点，土師質土器片3点が出土しているが，いずれも極めて小片であるため，ここでは割愛した。

(12)～(14)は石鏃である。(12)は平基無茎鏃で，大形の厚みのある剥片を素材として，調整はかなり粗く，左右非対称形をなす。(13)は凹基無茎鏃で，抉りが顕著な長脚を呈し，両側縁が直線的である。(14)は平基無茎鏃で，三角形を呈し，基部に細かな調整を施す。



第７図　縄文式土器拓影図，石鏃実測図

第4章　結　　語

最も点数の多い礫片の多くは被熱し，赤褐色に変色・破砕しており，完形礫の例はない。礫片の出土範囲は直径３ｍの円内に集中する傾向にある。一方で，利器・剥片類には被熱痕は無いものの，その分布状況は礫群の出土範囲にほぼ重なっている。また，出土層位は礫片，利器，剥片類のいずれもⅢ層下位から上位に集中している。この状況からⅢ層の下位から上位に至る１つの文化層が想定される。一方，この文化層中の礫片の出土地点及びその周辺には焼土・焼土粒・炭化物の検出はなかった。

縄文式土器は茅山式であるが，いずれも小片で，器形全体を復元するのは極めて困難である。茅山式土器をはじめとする縄文早期の遺物は周辺遺跡にも出土例は多く，この地域の特色である。今回の調査では遺構の検出は無く，包含層も消滅していたため，南内野遺跡が縄文時代早期の遺物の分布する遺跡であることを再確認するに終止したことは誠に残念である。

参考・引用文献

○「千葉県南大溜袋遺跡の調査」　考古学ジャーナル78号　戸田哲也　昭和48年

○「公津原」　千葉県企業庁　財団法人千葉県地域振興公社　昭和50年

○「獅子穴Ⅵ遺跡発掘調査報告」　富里村教育委員会・同調査会　昭和52年

○「東内野遺跡発掘調査概報」　同調査団　昭和52年

○「東内野遺跡第二次発掘調査概報」　富里村教育委員会・同調査団　昭和53年

○「東内野遺跡第３次発掘調査概報」　富里村教育委員会・同調査団　昭和54年

○「公津原Ⅱ」　千葉県教育委員会　財団法人千葉県文化財センター　昭和56年

○「両国沖Ⅲ遺跡発掘調査報告」　富里村教育委員会・同調査会　昭和57年

○「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―No.14遺跡―」　財団法人千葉県文化財センター　昭和58年

○「房総考古学ライブラリー１　先土器時代」　(財)千葉県文化財センター　昭和59年

○「成田市郷部北遺跡群調査概要」　成田市郷部北遺跡調査会　昭和59年

○「八千代市権現後遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―」　財団法人千葉県文化財センター　昭和59年

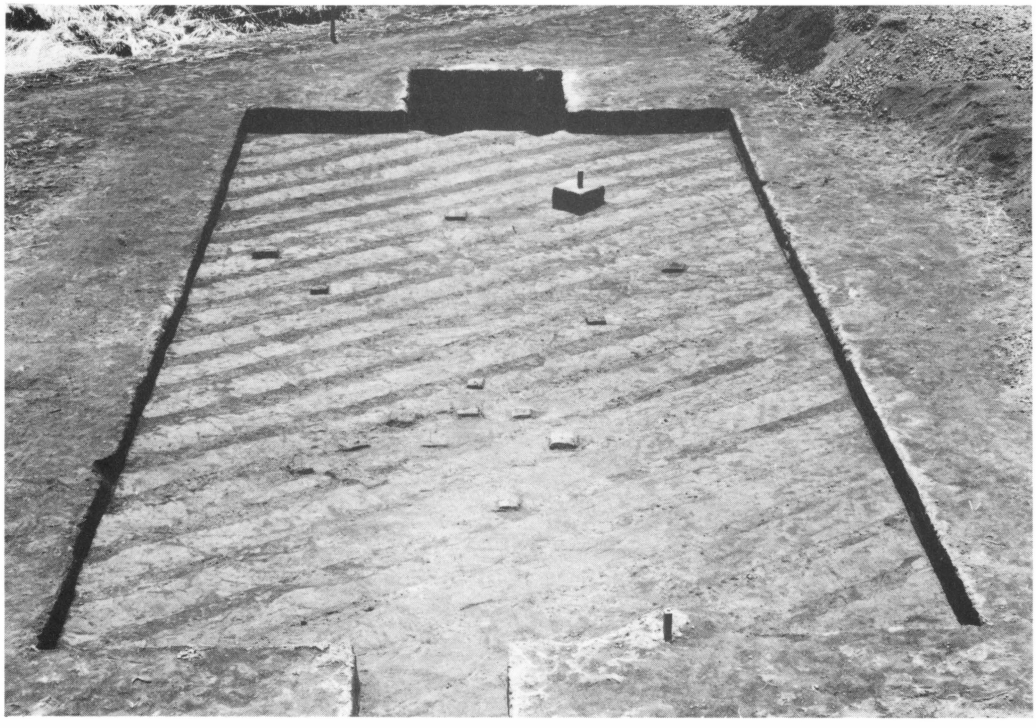
写　真　図　版

南内野遺跡遠景(西より)

調査区全景(西より)

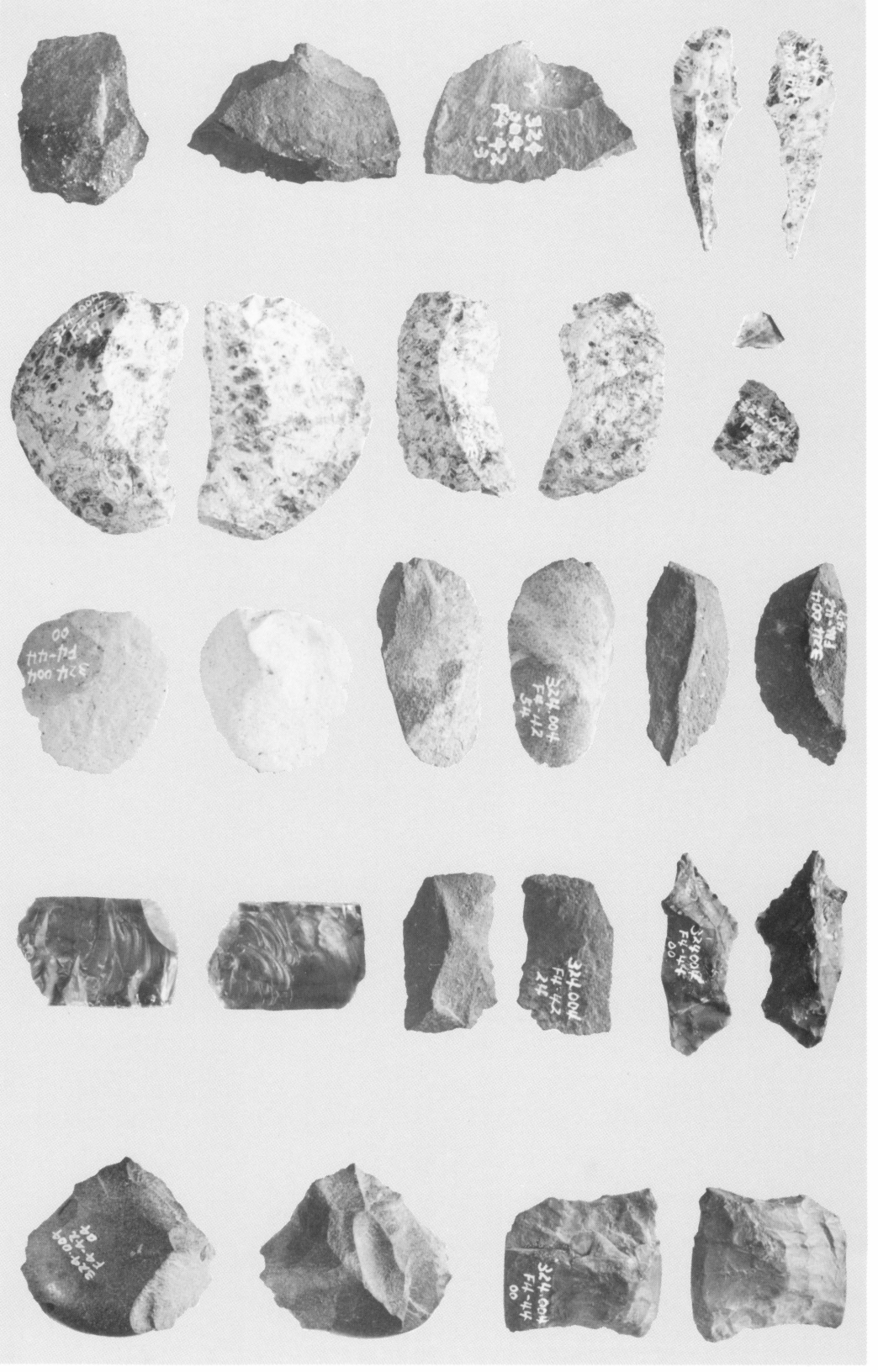
礫出土トレンチ(北より)

先土器確認調査土層断面(北より)

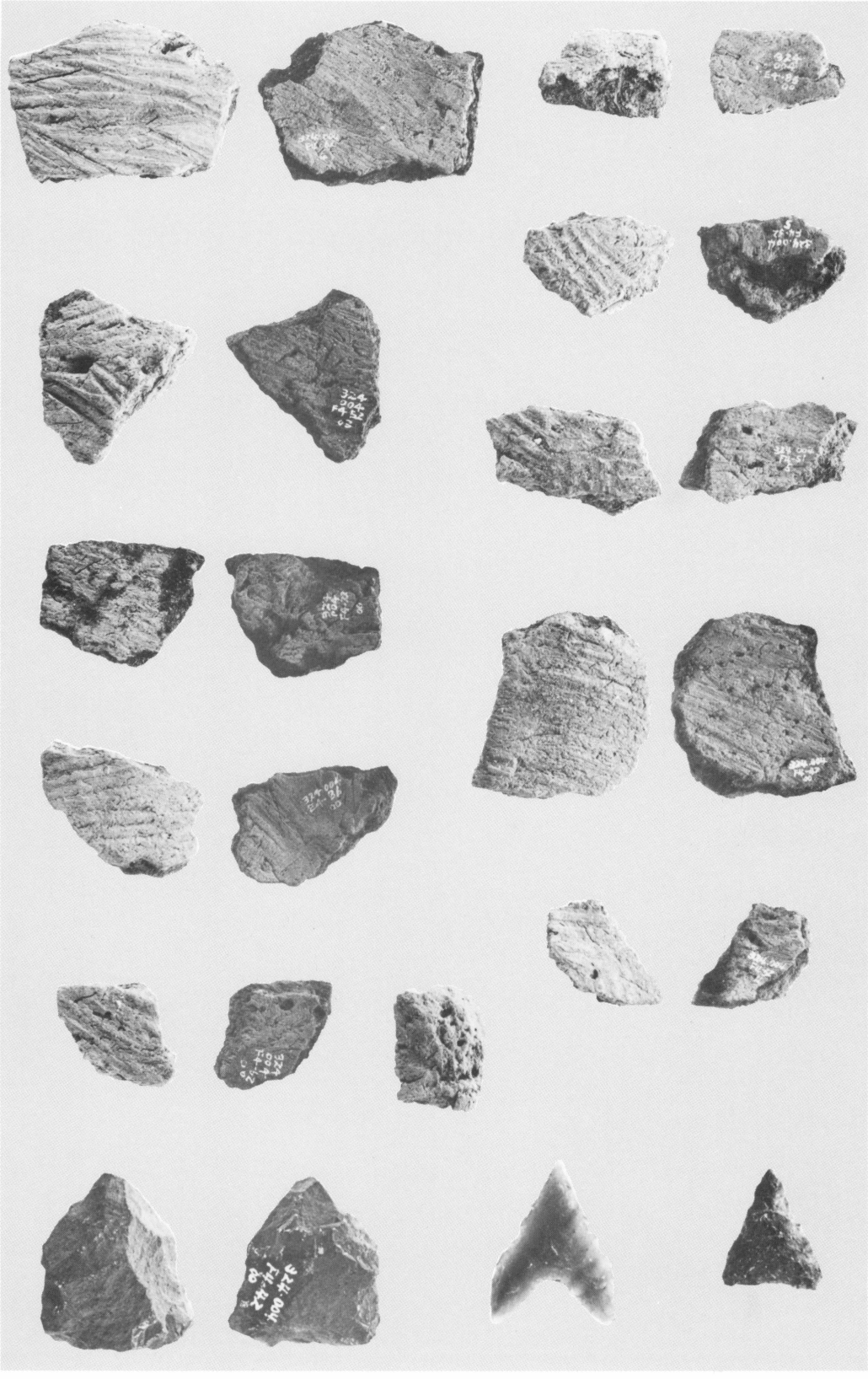


拡張地区全景(北より)

拡張地区東壁土層断面(北西より)



先土器時代遺物



縄文時代遺物

富里町南内野遺跡
－県立富里地区（仮称）高等学校建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

昭和60年12月30日発行
発　行　千葉県教育庁施設課
千葉市中央4丁目13番28号
財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号
印　刷　有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号